

## 入学前の学習状況等に関する調査

下田 健治<sup>1</sup>, 名木田恵理子<sup>2</sup>, 中西 啓子<sup>3</sup>  
村中 明<sup>4</sup>, 内山 克良<sup>5</sup>, 山口 恒夫<sup>2</sup>

### Investigation of Students' Learning State Before Admission in 2003

Kenji SHIMODA<sup>1</sup>, Eriko NAGITA<sup>2</sup>, Keiko NAKANISHI<sup>3</sup>,  
Akira MURANAKA<sup>4</sup>, Katsuyoshi UCHIYAMA<sup>5</sup> and Tsuneo YAMAGUCHI<sup>2</sup>

キーワード：理系・文系コース，学習状況，家庭学習時間，入学動機

#### 概 要

急速な社会情勢の変化は，入学する学生の価値観や勉学に対する意識を多様化させ，学力，学習意欲および学習活動の低下，専攻分野への不適応などが懸念されている．このような状況の下で，本学の平成15年度入学者を対象に，高校時代の履修科目や入学前の学習実態等について調査を行った．その結果，1) 平成15年度入学者のうち約35%は高校の文系コース，約40%は理系コースの出身であり，残りの25%は他のコース等（4年制大学，短期大学を含む）の出身者であること，2) かなりの学生が，専門教育で必要な理科科目を高校時代に学習していないこと，3) 高校時代の学習時間が「ほとんどしない」または「30分程度」と答えた学生が40%を占めること，4) 本学の入学動機の主なものは，「資格の取得」，「専門的知識・技能の修得」，「専門家としての就職」であることなどが明らかにされた．

#### 1. はじめに

激しく，急速な社会変化の波は，今や大学にも押し寄せ，なかでも少子化の波は大学を様々な局面から大きく揺さぶっている．10年前すでに少子化によって入学志願者が減少し，大学氷河期が到来することは予測されていたが，それに対する対策は一部の大学を除いてはほとんど行われてこなかった．さらに，産業構造および雇用状況に大きな変化がみられ，それに伴って本学に入学する学生の価値観や，勉学に対する意識も多様化してきた．そして大学生の学力低下によって，

(平成15年10月8日受理)

<sup>1</sup>川崎医療短期大学 臨床検査科，<sup>2</sup>川崎医療短期大学 一般教養，<sup>3</sup>川崎医療短期大学 第一看護科，<sup>4</sup>川崎医療短期大学 放射線技術科，<sup>5</sup>川崎医療短期大学 事務部教務課

<sup>1</sup>Department of Medical Technology, Kawasaki College of Allied Health Professions

<sup>2</sup>Department of General Education, Kawasaki College of Allied Health Professions

<sup>3</sup>The First of Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

<sup>4</sup>Department of Radiological Technology, Kawasaki College of Allied Health Professions

<sup>5</sup>Educational Affairs Section, School Office, Kawasaki College of Allied Health Professions

大学生の学習意欲の低下，学生が在籍する専攻分野への不適応，大学での学習活動の低下などが懸念される事態になってきた．このような状況の下で，大学教育を充実させ，学生に対するより具体的な教育活動を展開するには，まず現状把握のための客観的資料が求められる．本調査研究は，その目的に沿って平成15年度に本学に入学した新入生を対象にして，高校時代の履修科目や学習実態等について調査を行った．

調査項目は，「入学前の学習状況等に関すること」，「学習観，学習方略に関すること」，「学習動機に関すること」に大別し，それぞれについて紙面によるアンケート調査を行った．本稿では，調査項目「入学前の学習状況等に関すること」のアンケート調査結果を報告し，他の調査項目については，別稿<sup>1,2)</sup>で報告する．なお，本調査は，FD委員会の活動の一環として行ったものである．

#### 2. 調査方法

調査対象は，本学の第一看護科(略名：1N)，第二看護科(略名：2N)，臨床検査科(略名：MT)，放射線技術科(略名：RT)，臨床工学科(略名：ME)および介護福祉科(略名：CW)に，平成15年度に入学した

全学生である。調査人数は、1 Nが92名、2 Nが58名、MTが63名、RTが59名、MEが62名、CWが86名の計420名であった。調査の実施時期は、入学式終了後もない平成15年4月14日～4月19日とした。調査方法は、マークシート方式で、無記名、所属学科名のみを記入とした。調査項目全体では、設問は75であるが、それぞれの設問は、選択肢により単純に回答できるようにした。アンケートの回収率は、1 N、MT、ME、CWの4学科が100%、2 Nが98.3%、RTが88.1%であった。したがって、全学では98.1%（入学者数420名、回答数412名）の回収率であった。なお、平成15年度に本学の1 Nに入学した中国からの留学生（3名）については、本調査の対象外とした。

### 3. 調査結果

質問項目を四つに大別し、それぞれの質問項目での設問と選択肢、設問に対する回答結果を、以下に示す。

(1) 試験区分、理系・文系コースなどに関する質問  
設問1「あなたは以下のどの試験区分で入学しましたか」

選択肢 (①特別入試 ②推薦入試 ③一般入試前期 ④一般入試後期)

1 N、2 Nは、特別入試、一般入試後期は行わず、推薦入試および一般入試前期のみの実施である。1 Nでは、推薦入試に比べて一般入試前期の数がやや多く(55.4%)、2 Nでは、約70%が推薦入試による入学者であった(図1 A)。

その他の学科では、四つの試験区分のすべてを行っている。特別入試、推薦入試、一般入試前期、一般入試後期の各試験区分で入学した入学者の割合は、MTでは14.3%、31.7%、50.8%、3.2%、RTでは11.5%、28.9%、55.8%、3.8%、MEでは9.7%、24.2%、56.4%、9.7%であった。試験区分によって入学者の占める割合が異なるのは、区分ごとの定員や合格して実際に入学してきた学生数が異なるためである。

他の学科と大きく異なった分布を示しているのはCWで、特別入試による入学者が41.8%と最も多く、一般入試前期での入学者はおよそ30%と少ない。

設問2「高校を卒業したのは、いつですか」

選択肢 (①平成15年2～3月 ②平成14年2～3月 ③平成13年2～3月 ④平成12年2～3月 ⑤それ以前)

全学的には、平成15年2～3月卒、いわゆる現役が88.8%を占めている。学科別で現役の占める割合が最

も多いのは、CWの94.1%、次いでRTの92.3%、最も少ないのは、MEの82.3%であった(図1 B)。これらの学科では、現役以外の入学者としては、平成14年2～3月の入学者(1浪)がほとんどとなっている。それに対して、2 Nの現役以外の入学者(14%)では、70%が平成11年以前の既卒者である。

設問3「あなたの入学前の最終学歴は以下のいずれですか」

選択肢 (①高卒 ②大検 ③大学・短大卒 ④大学・短大中退 ⑤その他)

全学的には、高卒が94.9%を占めている。高卒以外の入学者5.1%のうち、大学・短大卒は1.7%であった(図1 C)。高卒が最も多かったのはRTの98.1%、最も少なかったのは2 Nの89.4%、次いでMEの91.9%である。2 Nには、大学・短大の中退・既卒以外の学歴(準看護師養成学校卒)をもつ者が8.8%いる。

設問4「高校を卒業した方にお尋ねします。高校では文系コースでしたか、理系コースでしたか、あるいはそれ以外のコースでしたか」

選択肢 (①文系コース ②理系コース ③ ①, ②以外のコース)

全学的に見ると、文系コース35.5%、理系コース40.5%、それ以外のコース23.5%であった(図1 D)。文系コースの学生が占める割合が高いのは、1 N(60.9%)とCW(57.6%)で、理系コースはそれぞれ27.2%、11.8%にすぎない。また、CWでは文系・理系以外のコースが30.6%を占めていた。理系コースが多いのは残り3学科、MT(68.3%)、RT(82.7%)、ME(62.9%)であった。2 Nでは文系コースが5.2%、理系コースが12.3%で、その他のコース(主に衛生看護コース)が82.5%であった。

(2) 理科科目の学習状況に関する質問

設問1「次の理科科目のうち学習したすべての科目を選んでください」

選択肢 (①総合理科 ②物理I A ③生物I A ④化学I A ⑤物理I B ⑥生物I B ⑦化学I B)

総合理科、物理I A、生物I A、化学I Aを学習した学生の割合は非常に低い(図2 A)。これは、一般に普通科高校ではI Bを選択させているので、当然の結果であろう。学習した理科科目の割合を加算すると、図2 Aのように、その数値は理科科目の学習実績を大まかではあるが表すことになる。これによると、MT、RTは、理科科目学習にかけた時間が比較的長く、そ

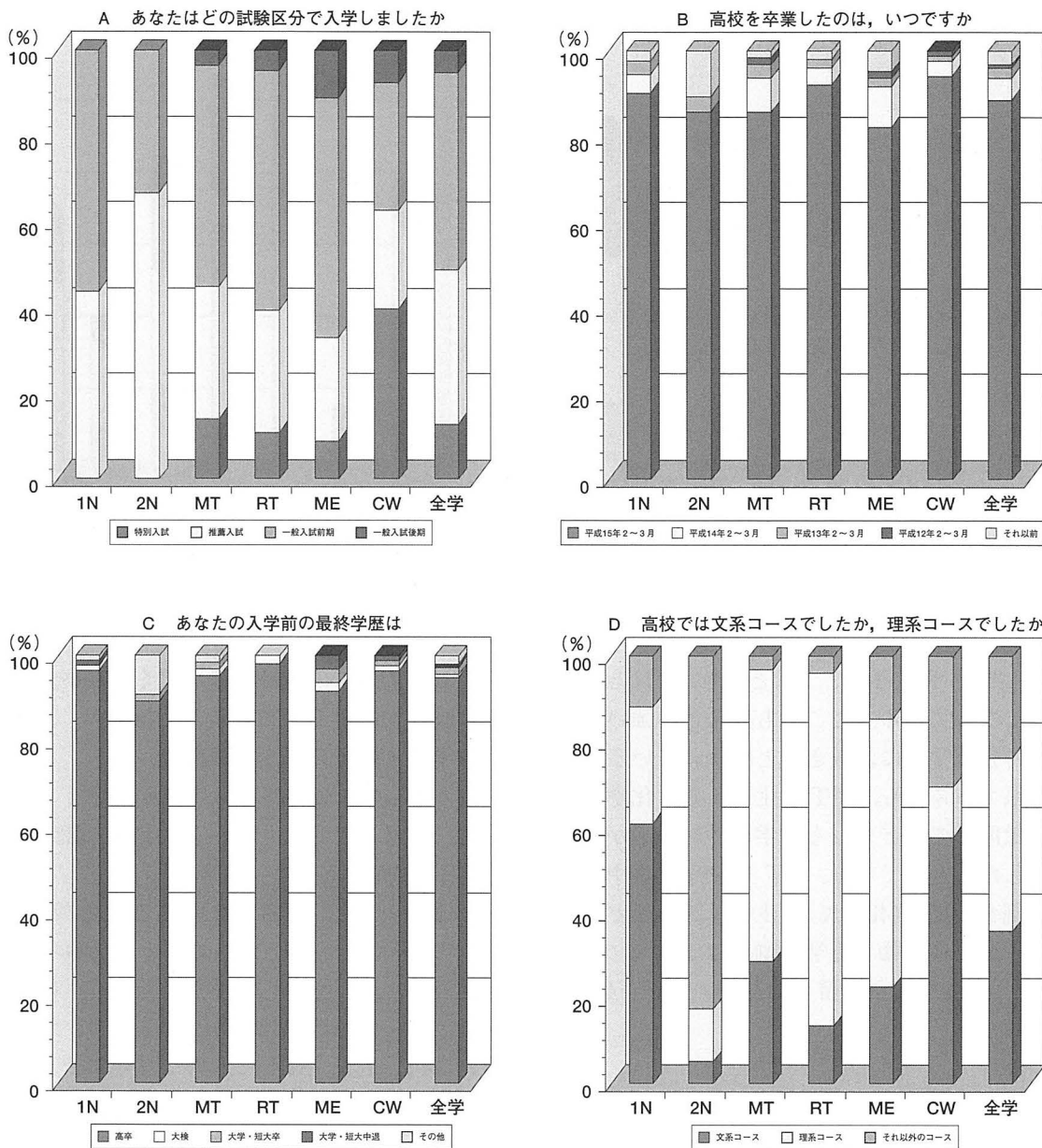


図1 試験区分、理系・文系コースに関する調査結果

れに対して1N, CW, 2Nは短いといえる。

科目別に見ると、生物IBを学習した学生の割合が高いのは、1Nと2Nでそれぞれ88%と87.7%、最も少ないのはRTで36.5%、次いで少ないのはMEの53.2%であった。逆に、化学IBを学習している学生の割合は、MT(84.1%)、RT(82.6%)が高く、1Nは9.7%でしかなかった。また物理IBではRTの履修が最も多く(61.5%)、少ないのは1N(10.8%)、2N(5.2%)、CW(13.9%)であった。

設問2「次の理科科目のうち受験のために集中的に学習したすべての科目を選んでください」

選択肢 ①総合理科 ②物理IA ③生物IA ④化

学IA ⑤物理IB ⑥生物IB ⑦化学IB)

総合理科、物理IA、生物IA、化学IAを集中的に学習した学生が少なく、物理IB、生物IB、化学IBを選んでるのは、受験のための学習という点で当然の結果であろう(図2B)。科目別に「集中度」を見ると、化学IBを最も集中的に学習したのは、MTで44.4%、最も少なかったのはCWの5.8%であった。生物IBを最も集中的に学習したのは、1N57.6%、最も少なかったのは2Nの8.7%であった。物理IBを最も集中的に学習したのは、RTで42.3%、最も少なかったのは2Nの1.7%であった。

各学科の集中学習科目の割合を加算していくと、MT

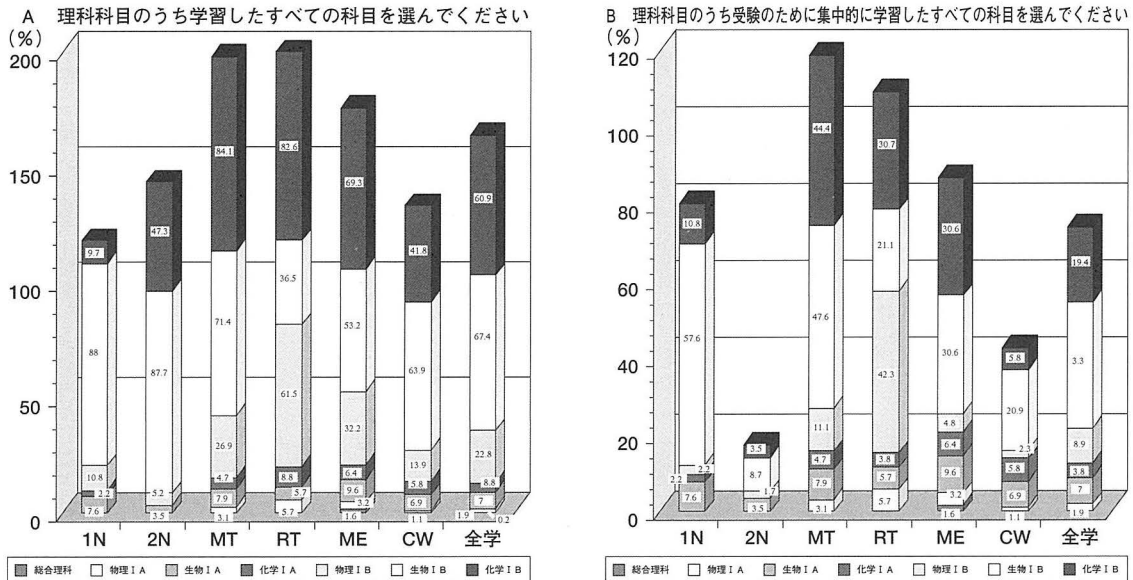


図2 理科学科の学習状況に関する調査結果

が最も多く、次に、RT, ME, 1Nと続き、2NとCWは非常に低くなっている。ここでも理系色の強い学科と、文系色の強い学科にはっきりと分かれている。ただ、同じ理系コースでも、MTは生物I Bと化学I Bの割合がほぼ同じで、どちらも入学者の約半数が「集中的に学習した」としている。RTは物理を集中学習した学生の割合が高く(42.3%)、生物は20%ほどでしかない。逆にMEは生物と化学の割合はほぼ同じだが(30%程度)、物理を集中学習したものの割合が4.8%に過ぎなかった。

### (3) 数学および英語科目の学習状況に関する質問 設問1「次の数学科目のうち学習したすべての科目を選んでください」

選択肢 ①数学 I ②数学 I・数学 A ③数学 II ④数学 II・数学 B ⑤工業数理)

履修した数学科目の割合を加算した数値は、多い順に1N, MT, ME, RT, 2N, CWとなっているが、各学科間にそれほど大きな開きはない(図3 A)。数学 I・数学 Aは、1N, MT, RT, MEでは90%以上、2N, CWでも75~85%の学生が学習していた。数学 II・数学 Bは、MT, RTでは90%以上と高い反面、2NとCWはそれぞれ12.2%, 38.3%と低かった。また2N, CWでは、数学 I, 数学 IIの履修者が占める割合が高く、2Nでは両科目とも半数、CWでも40%前後の学生が学習していた。

### 設問2「次の数学科目のうち受験のために集中的に学

### 習したすべての科目を選んでください」

選択肢 ①数学 I ②数学 I・数学 A ③数学 II ④数学 II・数学 B ⑤工業数理)

全体として、69.1%の入学者が数学 I・数学 Aを集中的に学習していた。次いで数学 II・数学 B 26.6%、数学 I 22%であった(図3 B)。

前述のように、学習したすべての数学科目については、学科間でそれほど大きな差が見られなかったが、「受験のために集中して学習した科目」については、学科によってその総計に差が出ている。すなわち、理系の MT, RT, MEにおいて集中学習した科目の割合が高く、CW, 2Nは低い。中でも最も高いRTが、最も少ない2Nの2倍以上という結果が出ている。

学科別に見ると、1Nでは数学 I・数学 Aが75.0%、数学 Iが21.7%、数学 II・数学 Bが19.5%であった。2Nは、CWとやや似ており、数学 I・数学 Aを集中的に学習した者はそれぞれ42.1%、41.8%であり、数学 Iは26.3%、24.4%であった。ただし、CWでは数学 II・数学 Bが10.4%であったのに対して、2Nでは1.7%と少なかった。MT, RT, MEはかなり似た傾向が見られ、数学 I・数学 A 80.9~94.2%、数学 I 13.4~25.3%であった。数学 II・数学 Bについては、RTが57.6%、MTが52.3%であるのに対して、MEは30.6%とやや低かった。

### 設問3「次の英語科目のうち学習したすべての科目を選んでください」

選択肢 ①英語 I ②英語 II ③オーラル・コミュニ

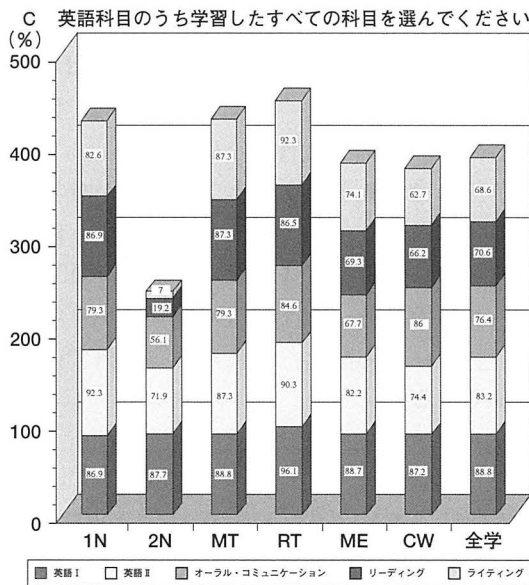
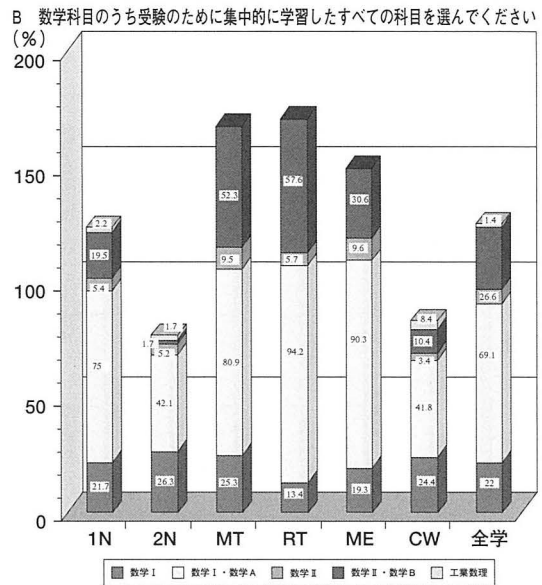
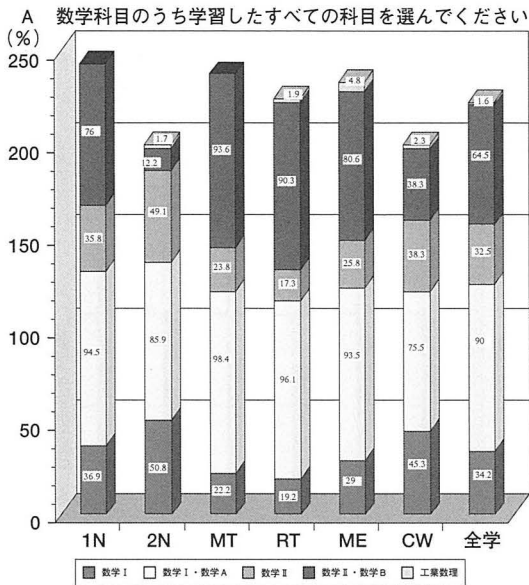


図3 数学科目および英語科目の学習状況に関する調査結果

ケーション ④リーディング ⑤ライティング)

英語I, 英語II, オーラル・コミュニケーション, リーディング, ライティングの学習割合は, 1N, MT, RTにおいてほぼ同じ程度であった(図3C)。ME, CWは, 前記3学科と比べてリーディング, ライティングの学習者率がやや低くなっている。2Nは, 他学科と比べ全体の科目数が非常に少なく, ライティング, リーディングを学習した学生がほとんどいない。

(4) 家庭学習の状況および入学動機に関する質問  
設問1「平日の家庭学習時間は, どのくらいでしたか」  
選択肢 ①ほとんどしない ②30分程度 ③1時間程

度 ④2時間程度 ⑤3時間以上)

全体として, 「ほとんどしていない」とした学生が25.3%, 30分程度が14.3%であった(図4A)。「1時間程度からそれ以上の学習をした」とする学生は60.4%であった。学科別では「ほとんどしていない」が最も多かったのは, MEで35.5%, 最も少なかったのは1Nで17.4%であった。「30分程度」という答えも含めると, ME, CWでは半数の学生が, 「ほとんどしないか, しても30分以内」という学習状況であった。1時間程度以上の学習をした学生の割合は, 1Nで約75%, 2Nで約60%, MTで約65%, RTで約60%, MEで約50%, CWで約45%であった。本学入学以前に家庭学習時間が多かったと考えられるのは1Nで, 少ないのはCWという結果であった。

設問2「平日, 家庭学習を行っている時間帯はいつ頃でしたか」

選択肢 ①不特定 ②帰宅から午後10時頃まで ③午後10時から深夜まで ④早朝から登校するまで)

家庭学習の時間を不特定と答えた学生は, 全学科では42.5%であった(図4B)。午後10時から深夜までは39.8%, 帰宅から午後10時までが16.7%, 早朝から登校するまでは1.0%であった。全学科を通じて帰宅から午後10時までを家庭学習の時間としているのは, 20%前後であった。

全学科を通じて, 家庭学習を不特定としたのはCWが最も多く54.7%, 最も少なかったのはMTの31.8%であった。午後10時から深夜にかけて学習する学生は, MT, RTでは約50%であり, 他の学科では30~40%程度であった。早朝に学習する学生は, MT, RT, CW



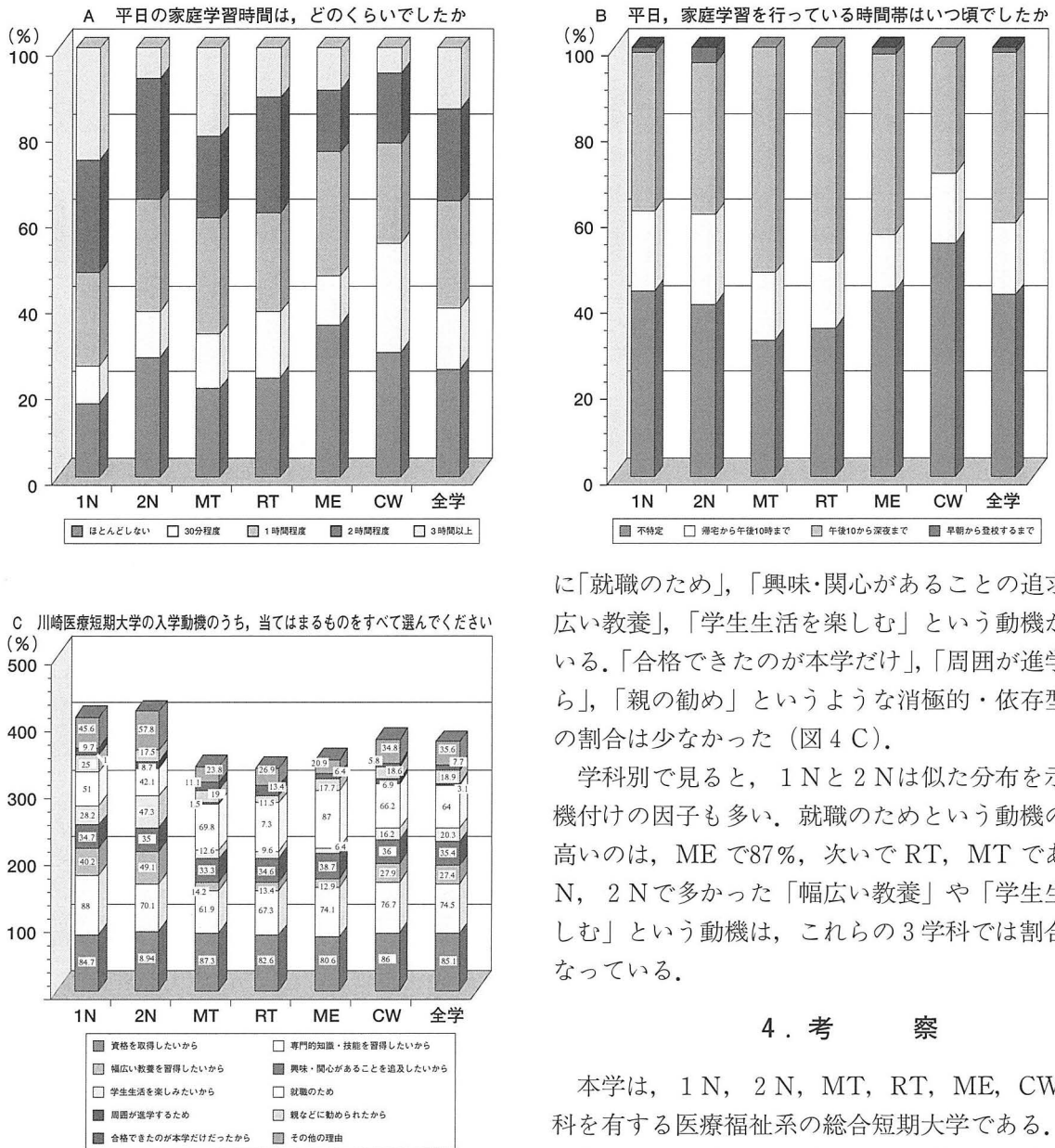


図4 家庭学習の状況および入学動機に関する調査結果

では全くみられなかった。

設問3「川崎医療短期大学への入学動機のうち、当てはまるものすべてを選んでください」

選択肢(①資格を取得したいから ②専門的知識・技能を修得したいから ③幅広い教養を修得したいから ④興味・関心があることを追求したいから ⑤学生生活を楽しまたいから ⑥就職のため ⑦周囲が進学するため ⑧親などに勧められたから ⑨合格できたのが本学だけだったから ⑩その他の理由)

全体では、85.1%が「資格の取得」、74.5%が「専門的知識・技能の修得」を入学動機としていた。その次

に「就職のため」、「興味・関心があることの追求」、「幅広い教養」、「学生生活を楽しまたい」という動機が続いている。「合格できたのが本学だけ」、「周囲が進学するから」、「親の勧め」というような消極的・依存型の動機の割合は少なかった(図4C)。

学科別で見ると、1Nと2Nは似た分布を示し、動機付けの因子も多い。就職のためという動機の割合が高いのは、MEで87%、次いでRT、MTである。1N、2Nで多かった「幅広い教養」や「学生生活を楽しまたい」という動機は、これらの3学科では割合が低くなっている。

#### 4. 考 察

本学は、1N、2N、MT、RT、ME、CWの6学科を有する医療福祉系の総合短期大学である。今年度の入学者は、全学科で420名(定員380名)であった。今回行ったアンケート調査は、入学1週間後に実施し、入学者420名のうち412名から回答が得られ、回収率は98.1%と極めて良好であった。これはアンケート直前に調査の趣旨、実施についての注意などについて十分説明したことによるものと考えている。

試験区分の違いによる入学者数は、先に述べたように、学科で募集人員に違いがあるため単純に比較することは難しいが、実際に入学した学生は、全学では特別入試14%、推薦入試36%、一般入試前期46%、一般入試後期4%となっている。すなわち、推薦入試、一般入試前期の二つの入試での入学者が約80%を占めている。特別入試は、各科とも10%前後の入学者数であるが、CWで約40%となっているのは、本人の学習意

欲の評価に重きを置いた小論文・面接・調査書および自己推薦書での総合評価で選抜した結果である。今回の調査では、四つの入試区分別に学習状況の傾向を見ることができるような集計はしていないが、より適性の高い学生の確保を目指して、今後その点も明らかにしていく必要がある。

全学で現役の占める割合は約90%で、そのなかで最終学歴は高卒が約95%であった。今年はおよそ20人の短大・大学卒・中退者が入学している。社会人入学も含めた生涯学習という今後の社会的傾向を考えると、この数字は今後増加していくことが予想される。高校生の意識の多様化に対応するだけでなく、社会経験のある人や高学歴者の受け入れ後の対応についても考慮する必要がある。

全学では、文系コース出身の学生が約35%、理系コース出身の学生が約40%で、それ以外のコース出身の学生は約25%であった。本学では、看護・福祉系である1N、2N、CWをどちらかといえば文系コース、医療技術系のMT、RT、MEを理系コースととらえることもできる。調査結果は、おおむねそれを裏付けるものであった。すなわち、1N、CWは文系コース出身の学生がいずれも約60%であり、MT、RT、MEでは理系コース出身の学生が、それぞれ約70%、約80%、約60%であった。ただし、2Nはそれ以外のコースが約80%と半数以上を占めたこと、理系3学科においても、文系コース出身の学生が10%~30%の範囲であることは、注意しなければならない。このことに対応して、本学では入学前教育および入学直後から基礎科目の補習を行っている。また、基礎科目については、授業に入る前にプレテストを行うことや、到達度を考慮した教育を企画するなどの対策を進めている。この方向性は、今回の調査でいっそう明確に支持されたといえる。

また理科科目の履修についての質問からは、学科によって補強すべき科目が示されたといえよう。すなわち、1N、2Nでは生物I Bを学習した者は約90%と非常に多いものの、集中的に学習したかという問いでは、1Nは60%弱、2Nは10%にも満たなかった。まして、化学、物理はほとんど学習していないといってもいい状態である。MT、RT、MEの理系3学科では、化学I Bは70~80%を超える学生が履修しているが、MTでは生物I Bは高いものの物理I Bは低く、逆にRTでは化学I Bが低く、物理I Bが高かった。物理I Bを基幹科目としているMEで、当該科目の履修者

が30%、集中的に学習したのは5%弱という結果は、注意を要する。このことはMEに文系コースの学生が約20%入学していることに関係すると考えられる。これらはいずれも今後の学習の基幹となる科目である。入学後に基礎からの理科教育の充実と、入学者の動機付けが必須であるといえよう。

全学的に数学では、数学I・数学Aはほとんどの学生が学習し、数学I・数学Bは約60%が学習していた。特にMT、RT、MEの医療技術系3学科では両科目ともほぼ90%以上の人が学習していた。このことから高校ですでに基礎的なことは学んでいると考えられる。

数学科目の中で集中的に学習したとしているのは、全学的に見れば、数学I・数学Aで約70%、数学II・数学Bは約30%であった。これを医療技術系3学科で見ると、数学I・数学Aを集中的に学習したとする学生は、90%前後、数学II・数学Bについては、MT、RT 50%以上、MEはやや低く30%であった。看護福祉系の学科は、これらに比べて低く、入学後の教育を工夫する必要がある。

英語科目では、2Nを除いて学科間の差は少なく、ほとんどの学科の入学者が英語I・英語IIを学習していた。ただし、細かく見ると、CWと2Nにおいて、「発展学習」ともいうべきライティングとリーディングの学習実績が弱いことが見受けられる。全科一律の英語教育では、学生の実情に合わない可能性があり、今後、英語教育の創意工夫が必須となってくるであろう。

学力低下については、最も社会的にマスコミをにぎわしている問題の一つである。これは学校での授業時間、すなわち教育内容が削減されていること、家庭での学習時間が以前に比べて極端に減少していることなどが挙げられている。

本調査でも家庭学習が皆無である学生がかなりの数、入学しているという結果が出ており、この全国的傾向に対して、受け入れ側である大学がどのような教育プランをもっているか問われるところであろう。その基盤となるものは、確かな教育的信念とそれを粘り強く続けることのできる忍耐力と教育力である。

家庭での学習時間の長さについては公開、未公開を含めて多くの教育施設で調査が行われている。一つの例として、新潟県教育委員会がインターネット上で公開した平成14年度高校生の学習と進路に関する調査(保護者対象編)<sup>3)</sup>がある。このなかで家庭学習を「ほとんどしていない」は32.8%、「30分程度」は15.9%で、こ

の合計は約50%となっている。本学の今回の調査では、「ほとんどしていない」が25.3%、「30分程度」が14.3%で、合計約40%であることから、新潟県教育委員会の調査結果と近い値といえよう。ただし、新潟県の調査は、高校生（1～3年生）を対象にしたものであることから直接比較することは難しいが、約半数の人はほとんど学習時間を確保していないという状況は、ごく一般的と言って差し支えないであろう。

一方、柳井ら（2002）<sup>4)</sup>が中心として行った「大学生の学習に対する意欲などに関する調査研究」では、1時間未満が全体の45%を占め、0時間という学生も20%に達していると述べられていることから、勉強しない大学生像が浮かび上がる。さらに柳井ら<sup>4)</sup>は女子が男子に比べて学習時間は上回ったとしているが、今回の調査では男女差は確認できていない。

学習時間の低下は、義務教育、高等教育、生涯教育（生涯学習）という一連の学びを通して、極めて深刻な問題を投げかけている。基礎学力の低下は、社会問題として取り上げられているが、根本的で深刻な問題は「学習意欲の低下」である。いまや大学においても学習意欲をどう引き出すか、大学でどう学ぶかという「学ぶ意義」についての意識付けが要求される時代となってきた。動機付けは、もはや学ぶ側の問題ではなく、大学に課せられた使命であろう。さまざまな「仕掛け」を考案、実行していかなければならない。ここで一つの対応措置として生まれているのが、高校・大学間連携である。高大連携は、高校生の学習意欲や関心を高め、大学選択の一助となるだけでなく、目的意識を持たせるといふ点からは、大学の社会的役割の一つでもある。今後、一層強化していく必要がある。

学習時間は、「ほとんどない」と「30分程度」と答えた学生が40%も占めているという事態とともに、「学習しても時間帯を不特定」とした学生が40%を超えているという結果は憂慮すべきである。これは学習が習慣化していないことを意味しており、これで本当に学力がつくとは思えない。学習時間帯は、「帰宅から午後10時ごろまで」とする学生は、ほとんどすべての学科が20%以下で、最も多かったのは「午後10時から深夜まで」が全体では約40%であり、学科によっては約50%、少ない学科でも約30%であった。早朝から登校までに学習する学生は皆無であった。「午後10時から深夜」と

いうのが多いのは、現在の社会現象をあらわしているのであろうが、いずれにしても学習時間帯や時間の確保の習慣化、いわゆる生活の習慣化は、健康上の問題も含めて大きな社会問題である。

入学動機については、「資格の取得」、「専門的知識・技能の修得」、「専門家としての就職」が大半であった。これは本学の特徴であり、この動機に依っていくことが本学の目指す方向であり、価値であると考ええる。さらに興味・関心の追求、教養の修得、学生生活を楽しむことなどの動機にも応じていくべきであろう。

本学では、親子、兄弟姉妹が入学するというケースがよく見られる。親などの勧めが入学動機として挙げられているのもうなずける。同窓会・社会からの期待も大きく、建学の理念にある「深い専門的知識・技能を身につける」、「人をつくる」ことを実行する大学としての評価・信頼が入学動機へとつながっているといえよう。

## 5. 謝 辞

本調査にご協力いただいた平成15年度入学者の皆さんに深く感謝いたします。また調査の円滑な実施に全面的にご協力いただいた各学科の担任をはじめ専任の先生方に心より感謝いたします。さらに膨大な量の調査結果の事務処理に関して、年度始めの多忙ななか厳重なチェックをしていただいた事務部教務課の方々、また調査結果のデータ処理について貴重な助言をいただいた一般教養の小林早苗先生に深謝いたします。

## 6. 文 献

- 1) 下田健治, 名木田恵理子, 中西啓子, 村中 明, 内山克良, 山口恒夫: 学習観および学習方略に関する調査, 川崎医療短期大学紀要 23: 9-18, 2003 b.
- 2) 下田健治, 名木田恵理子, 中西啓子, 村中 明, 内山克良, 山口恒夫: 学習動機に関する志向調査, 川崎医療短期大学紀要23: 19-31, 2003 c.
- 3) [URL] <http://www.pref.niigata.jp/highschool/gakusyuuusinnotyousa.pdf>, 新潟県教育委員会: 平成14年度高校生の学習と進路に関する調査(保護者対象編).
- 4) 柳井晴夫: 大学生の学習に対する意欲等に関する調査研究(平成12, 13年度文部科学省教育改革推進のための総合的調査研究委託報告書), 高等教育学力調査研究会, 2002.